

『オレンジ式コードパターン即興技法』の説明

〈イントロダクション～音楽活動場面の“即興”について〉

筆者は、音楽療法であれ、対人援助手段としての音楽活動（例えば教育現場での教材など）であれ、本質的には大きな相違はないと考えています。ただ、本法は筆者の音楽療法活動の現場から必要に迫られつつアイデアを得た技法であり、まずは筆者的に考える音楽療法における即興につき、以下に述べます。

音楽療法における即興とは、

①自由度を伴う対象者の音(楽)表現を治療者側が予測性を持ちつつ支える〈治療枠設定即興〉、

又は、

②予測できない対象者側の音(楽)表現に治療者が添う〈治療枠非設定即興；フリー即興〉営みであり、

これらいずれかのプロセスにおける音(楽)的主導権を最終/結果的には治療者が緩やかに請け負い、その場面を治療(問題解決)的に導くこと

いうまでもなく本法は、上記②に比べ①に重点を置いた技法です。これらを念頭に置きつつ、以下に話を進めたいと思います。

〈音楽活動における即興の取り扱いをどう捉えるか〉

音楽活動の現場（音楽療法）において、リズム成分を除いたメロディ・ハーモニー成分（＝メロディ・ハーモニーの背景にはモードやスケールといったテーマが見え隠れしています）を課題とした“即興”が語られる折、従来的には、音楽的発達段階を完了した（音楽認知が可能で他者とハーモニーを持てる）前思春期以降の対象者へはペントニックスケールを中心とした“ランダムな音合わせによる響き合い即興”や障害児童等を中心とした取り組みでは“動きに対しての音付け即興（通常的にはリズム性重視）”などが挙げられます。

前者の場合は、①不協和な音を選ばない（響き合う）、②和風、民謡風の懐かしい感じ、ということが利用目的として考えられますし、後者の場合は、不協和音、教会モード、全音音階（6音音階）等を持ち込み、“音と動き・音への気づき”というリトミック的理論背景（発達支援的取り組み）を基盤としているように思われます。いずれにせよこれらモード・スケールの手法は、音の並びにおける“拘束感・非拘束感”や“ちょっと変わった雰囲気”などを活動へ持ち込むにはとても有効な手法と考えられます。

しかし、本邦における今日的音楽療法の現状としては、メロディ・ハーモニーに関連するもう一つの重要な要素、つまりコード（和声）機能という課題についてはあまり注目されていないのでしょうか。本法では、その“コード”にスポットを当て話を進めていきたいと考えています。また従来的音楽療法の即興では、対象者とともに即興演奏を楽しむというよりも提供者側の伴奏の一技法として取り組まれることが多いか、もしくは対象者が奏でたとしても“ランダムペントニック”、“場当たりの音楽”等に風穴を開ける強力な方法論は未だ提出されていないようにも思われます。音楽活動のリーダーに卓越した能力があればそれらもまた『強力な音楽』として成立します

が、それがなければ『手続きとしての音楽』のまま音楽は立往生してしまいます。これらへの問題意識と日々の活動への行き詰まりが、筆者が本書を記す大きな動機となっています。

筆者は成人領域と認知症性高齢者の領域で日々音楽活動(セッション)をおこなっています。たとえば高齢者の場合は、民謡などのペンタトニックスケール(和風な五音階)を使用し、太鼓などのリズム活動と絡めながらの即興合奏をおこないますが、それらは対象者の経験値としての文化的背景とも相まって効果があるようです。いっぽう成人領域(心理的ストレスを抱えた対象者)の場合、同様なペンタトニック的手法もやってみるものの“音楽的達成感を得難い”、“何を意図しているか分からない”、“延々と続くだけ”、“繰り返してやるとつまらない”というシビアな意見も寄せられ実際の場面ではあまり人気メニューとして定着しませんでした。もちろん提供者としての私のプレゼンテーションにも問題があったのかもしれません。しかし、よくよく考えてみれば成人の対象者の場合、多くは既製楽曲を普通に楽しめているという生活状況のなかにあり、言い換えれば“音楽イメージが出来上がっている”のでそのなかで楽しみたい”というごく当たり前のニーズが存在すると考えられます。

ここで“音楽的発達段階(音・音楽認知)”という視点から児童・成人・高齢者の各対象者を比較してみます。成人の場合は、他の対象者に比較して“音楽的発達”がある程度達成・維持されているという事がいえます。児童の場合はもちろん発達途上にあり、高齢者の場合は加齢に伴う諸機能の低下が指摘されます。一例として、障害児や痴呆性高齢者の活動では音楽というよりもむしろ音を媒介としたコミュニケーションに主眼が置かれる比率が高く(たとえば打楽器でのコミュニケーション)、逆に成人の場面ではより音楽的な合唱・合奏という場面がメインであったりすること(音楽を普通に認識できるので他者とも響き合える)も活動素材としての音・音楽を考慮するヒントとなるのではと思われます。つまり、成人対象者は“音楽という枠”を明確に認識できる傾向にあるため、和声的感覚(調性)のなかでの音やメロディを認知したり、音楽の時間的構造における“続く感じ”、“終わる感じ”という要素を他対象者に比べ容易に提供者や対象者同士で共有しやすい傾向にあるといえます。誤解の無いように申し上げれば、もちろんモードやスケールといった課題は深めれば非常に有用な音楽療法的意義があり、今後も成人領域での応用の多大なる可能性が存在しますし、それらに関しては後に述べますが、むしろ本書の後半ではそれらモード・スケールとコード機能との共存が大きいテーマであったりします。

それでは、先に述べた“音楽の枠”とは何でしょう?今回はそれを“和声の進行(コード進行)”と捉えました。I・IV・Vと表される主要3和音を用い「ドミナント(V)からトニック(I)に戻って解決;ドミナント・モーション」と音楽の授業で学んだ事と思いますが、まさに音楽は時間という枠のなかで続こうとしたり、終わろうとしたり、私たちは揺れながら音を楽しんでいます。その“揺れ”をどのように演出するかが『コードパターン(循環コード)』のなかにはたくさん詰まっています。本書では“音楽活動における簡単で最強なレシピとしてのコードパターン伴奏を用いての対象者との即興演奏(対象者側が即興する)”をテーマとして御紹介しますが、それほど難しい事ではありません。何しろ専門的な音楽教育を受けていない私が言うのですから間違いありません。むしろ、巷にあふれる音楽の多くが“コード音楽”であり、その利用価値は大きいと考えています。